

哀しきペナン

1 泥の川が交わるところ

1990年代半ば。当時、アジア各国は成長地帯造りを活発化させていた。「華南経済圏」、「メコン川流域経済圏」、「インドネシア・マレーシア・タイ成長の三角地帯」などが急成長していた。米国、オーストラリア企業など、域外の企業も先を争って参入した。

そんな時、「国際弁護士ネットワーク」のアジア・太平洋地区総会が、マレーシアのペナン島で開かれた。

それまでアジア・ビジネスには縁がなかったが、ちょうどよい機会なので参加した。

ペナンに行く前にクアラルンプールに1泊し、わたしはバスで市内観光を楽しんだ。「クアラルンプール」は、マレー語で「泥の川が交わるところ」を意味するという。人口100万人のこの首都は、KLと愛称されている。

ゴンバック川とケラン川が合流するところに、回教寺院「マスジッド・ジャメ」がある。玉ねぎ型のドームと2本の高い尖塔がそびえ、中庭は日本人の女子高生の観光客でにぎわっていた。

クアラルンプール駅（旧中央駅）は、インド・イスラム様式の纖細な柱やアーチで有名である。開業は1886年というから、歴史は古い。

「イスタナ・ネガラ」は国王が住む王宮で、黄金のドームと優雅な館が、緑の芝生に映えて美しい。

その他、伝統的なマレー建築を再現した「国立博物館」、植民地だったころイギリス人がクリケットやラグビーを楽しんだ「ラングール・クラブ」、マレーシア独立戦争の戦死者を悼むための「国家記念碑」などが観光スポット。

どこも観光客であふれてはいたが、ポルトガル、オランダ、イギリスなど、西欧の列強の植民地となった苦い歴史が偲ばれる。

3時間のあわただしい市内観光から帰ってホテルのロビーを通りかかると、キム先生（韓国）にバッタリ出くわす。1年ぶりの再会である。相変わらずゴルフバッグ持参で、今日も1ラウンド回ってきたという。キム先生と久々きゅうかつを叙していると、見覚えのある長身の男が近づいてきた。ニュージーランドの代表のジェラミー・カー。彼は年のころは30代の後半、いつもにこにこ笑っている。

キム先生とジェラミーと、短い立ち話をして別れる。彼らも明日朝、同じ便でペナンへ飛ぶ予定である。それまでそれぞれつかの間のKLを楽しんでいる。

2 ムティアラ・リゾートにて

翌朝、われわれはKLからペナンへ飛んだ。

ペナンは「インド洋のエメラルド」と呼ばれる、東南アジア屈指のリゾートである。

メンバーはペナン島の最北端バツーフェリンギにある、ムティアラ（マレー語で真珠の意味）に集った。ヘルスクラブ、サウナなどのリクレーション設備を備え、全客室からマラッカ海峡を眺望することができる。

ホテルの小会議室を借り、2日をかけ、地区メンバーの協力関係について討議される。

出席者は日本、香港、韓国、フィリピン、タイ、マレーシア、ニュージーランド、ロサンゼルスの各代表。

会議の司会は、マレーシア代表のアナド。会議の冒頭に、メンバーの簡単な自己紹介があつたが、ほとんどのメンバーは旧知の仲である。このような小会議こそ、お互いの信頼感を醸成するのにふさわしい。数十人の大会議では、ただ名刺を配って歩くだけの薄い付き合いしかできない。

今回の主な議題が、マレーシア代表から示される。

- (1) 台湾、シンガポール、インドのメンバー加入の是非。
- (2) 各国における解雇及び整理解雇に関する判例の動向。
- (3) 各国の景気の動向と各メンバーファームの協力の状況。
- (4) TRIPS協定（知的所有権の貿易関連の側面に関する協定）の各国における批准の見通し。

会議のトピックは固い感じがするが、実際は皆リゾート・スタイルのくだけたスタイルで、ジョークが飛び交いリラックスした雰囲気である。

参加メンバーは知的所有権に強い法律事務所が多く、商標権、著作権などの知的所有権の動向に興味がある。ちょっと前まで、アジアの事務所は知的所有権については興味を示さなかつたが、今は様変わり。知的所有権ビジネスが、事務所の収入に大きく貢献するようになっている。

休憩時間には、コーヒーカップを片手にビスケットを頬張りながら、世間話に余念がない。必ずしも皆英語がうまいわけではないが、ダイアナ妃の不倫スキャンダルやO. J. シンプソン事件（フットボールプレイヤーのシンプソンが妻を殺害したとされる事件）など話題にこと欠かない。

異文化同士のメンバーでは、共通の話題のネタ元はCNNニュースである。シンプソン事件にしても、CNNを見ていないと最近の動きをフォローできない。こんなこともあって帰国後わたしは遅まきながら自宅にCNNをひいた。

メンバーはそれぞれ育った環境も文化も全く違う。

アナドはインド系でヒンズー教徒である。ヒンズー教徒だから、当然、輪廻転生を信じている。キム先生はキリスト教徒で、タイのワラウットは仏教徒である。

わたしは自称禅宗徒だが、実際は不可知論者である。

このように皆背景がちがうから、微妙な政治問題や宗教問題は避けるのが礼儀。天気、旅、仲間の消息などの当たり障りのないトピックが好まれる。

3 日焼け止めのいらないリゾート？

総会とはいいうものの、最大の楽しみは観光である。最初KLで開く予定だったのが、ペナンになったのも、多くのメンバーが「青い空」と「インド洋のエメラルド」のキャッチフレーズに惹かれたからである。

パラセイリング、水上スキー、カタマラン（3人用の双胴型小型ヨット）、プロンコ・ライド（細長いバナナ型のゴムボート。モーター舟艇に引いてもらう）、スキュー・バダイビング、ウィンドサーフィンなどのマリン・スポーツが楽しめる。

だが、この時期のペナンは期待を裏切った。

会議を3時には終え、海辺に繰り出したものの、どんより曇った空は鉛のように垂れ込めている。陽の光も輝きを失い、まるで濃いサングラスをかけて見たような光景。微風が吹き、時折ココナッツの木が揺れているが、何か物哀しい。

日焼け止めクリームのいらないリゾート地ほど、興をそがれるものはない。

今の季節のペナンはいつもこんなひどい？

わたしの質問にタイのワラウットが答える。

いや、本当は抜けるような青空とまぶしい太陽の島なんだ。この^{もや}靄はインドネシアで起こった山火事のせい。インドネシアのカリマンタン島やスマトラ島で発生した山火事の煙が、季節風に乗ってマレーシアまで流れ込み、マレー半島はもう1ヶ月もスモッグに覆われているんだ。

キム先生やアナドは、パラセイリングで空高く舞い上がったり、水上ジェットに乗って遊んでいる。だが、メンバーの多くは意外な天候に落胆し、早々に泳ぎを切り上げる。

スモッグの原因は、焼き畑の火が燃え移った山火事に加え、野焼きや車の排気ガスなどが加わった複合汚染だという。

戸外にいると喉や涙目が止まらない。視界も極端に落ちているから、車ものろのろ運転。空港では日中も滑走路のランプが点灯され、学校では屋外の体育が中止になった。もうすぐ学級閉鎖になるらしい。

二酸化硫黄や浮遊粒子物質を示す大気汚染指数は、過去最高の142を記録した。100が許容レベルだというから大変な汚染である。

総会の終わった後、ビジネスを忘れ、2日ほどマレー半島観光を楽しむつもりだったが、わたしは早々に切り上げ帰国した。

「インド洋のエメラルド」「東洋の真珠」とも呼ばれる国際級のリゾート地だが、わたしが見たのは、汚染された物哀しくも痛々しいペナンだった。

(追記)

当時わたしは、ペナンの汚染が地球温暖化の兆しだったとは、気づきもしなかった。20年後、パース（オーストラリア）で燃え盛る山火事を見た時も、局所的な現象と思って見過ごした。気候変動は、われわれの予想を超えた規模とスピードで進んでいたのだ。危機を見過ごしたツケが、いま人類を襲い始めている。